OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国古算書研究会
Author(s)	張替, 俊夫
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 18-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58729
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　夜号（総六十一号）平成二十七年十二月　一八―二二頁

〔研究会通信〕

中国古算書研究会

張替俊夫

一、『算数書』研究会から中国古算書研究会へ

現在の「中国古算書研究会」は「張家山漢簡『算数書』研究会」の後身である。張家山漢簡『算数書』は、一九八四～五年に中国湖北省荊州市の張家山漢墓より発見された竹簡の中に含まれていた算術書である。『算数書』の成立年代は諸説あるが、『九章算術』の成書年代よりも二～三世紀先行すると考えられ、その発見時では『九章算術』に代わって、中国最古の算術書と見なされていた。

大川俊隆は、二〇〇一年十月に「張家山漢簡『算数書』研究会」を組織した。この『算数書』研究会の目的は下記の通りであった。

（一）『算数書』の写真版に基づいて独自に釈読を行い、数学・数学史的考察を加え、『算数書』の各算題の正確な解釈を与える。

（二）竹簡の出土状況により、『算数書』算題の配列を確定させる。

（三）『九章算術』を含む算経十書との比較を行い、『算数書』から『九章算術』に展開していく二、三百年の質的差異を数学的・数学史的に解明する。

上記の（一）と（二）に基づいた成果として、二〇〇六年十月に張家山漢簡『算数書』研究会編「漢簡『算数書』―中国最古の数学書―」（朋友書店）が出版された。また、「張家山漢簡『算数書』研究会」の各人の研究成果が「張家山漢簡『算数書』の総合的研究」（大阪産業大学産業研究所・産研叢書二六、二〇〇七年二月）とし

てまとめられた。しかし、（三）の課題に関する研究は現在もまだ途上である。

『算数書』の研究が一段落をついた段階で、我々は今後の研究の進展を考慮し、残された課題を探究していくための新たな研究会として新たに「中国古算書研究会」（以下、単に研究会という）を組織することとした。その研究会の第一回は二〇〇七年四月に行われた。研究会発足時の構成員とその専門分野を紹介する。

張替　俊夫（大阪産業大学教養部教授・空間グラフ理論）（代表）
大川　俊隆（大阪産業大学教養部教授・中国古文字学）
小寺　裕（東大寺学園高等学校教諭・和算研究）
角谷　常子（奈良大学文学部史学科教授・中国古代史）
田村　三郎（神戸大学名誉教授・数学史、数学教育）（故人）
田村　誠（大阪産業大学教養部教授・三次元多様体論）
馬場理恵子（京都女子大学非常勤講師・中国古代史）
矢崎　武人（平城宮跡資料館解説ボランティア・古代暦算学）（故人）
吉村　昌之（大手前大学非常勤講師・簡牘学）
大西　正男（神戸大学名誉教授・数学基礎論）（オブザーバー）

構成員の多くは、『算数書』研究会から引き続いて参加していた。研究分野を見て分かるように、数学・数学史を専門にする者と中国史を専門にする者が協力する体制となっている。

研究会ではこの後、二〇〇九年から武田時昌（京都大学人文科学研究所教授・中国思想）が構成員に加わり、さらに研究が続けられた。しかし残念なことに、『算数書』研究会からの構成員であった矢崎武人が二〇一一年三月に、田村三郎が二〇一三年十二月に物故している。

二、中国古算書研究会の沿革―『九章算術』と『数』の研究

これまでの算経十書、特に『九章算術』の研究は、『九章算術』が中国最古の算書であるという前提に立っていた。また、中国の学者はその成立年代をできるだけ古い時代に置こうとする傾向が見られた。ところが、『算数書』の発見によってその前提が崩れ去り、『九章算

術』の成立年代の再検討が必要になってきた。その問題をさらに明確にするために、『算数書』と『九章算術』の関係が詳細に検討されなければならなかった。

研究会は『算数書』研究会の方針を基本的に受け継ぐものとして進められた。まず『九章算術』の釈文、訓読、現代語訳及び注釈を共同で進め、完成させる。この釈文、訓読、現代語訳及び注釈は、『算数書』研究の成果を加えた上で、絶えず『算数書』との比較研究を行ってゆくものとした。その意味で、かつての『九章算術』の訳注とは一線を画するものとすることを我々は期して研究を進めた。なお、『九章算術』の底本としては、現在のところ校訂が最も高水準にあると考えられる郭書春「匯校九章算術（増補版）」（遼寧教育出版社、二〇〇四年）を用いることとした。

我々が『九章算術』の訳注を作成する作業に邁進していた二〇〇七年十二月、湖南大学岳麓書院は緊急保護の名のもと、香港において二千百枚の秦代の竹簡（少数の木簡を含む）を購入した。この竹簡は、中国本土のある地より盗掘され、香港に持ち込まれていたものである。この中に『数』と題する二百二十余枚の竹簡があり、これらは『算数書』と全く同類の算術書であった。

研究会は、二〇〇九年三月の胡平生（中国文化遺産研究院）による講演「最近の中国出土簡牘について」においてこのことを知った。この時、湖北省の雲夢睡虎地漢墓より『算術』と題される竹簡が出土していることも報告された。

研究会は胡氏の報告を受けて、研究会の数人が二〇〇九年十二月、長沙の岳麓書院と武漢の湖北省文物考古研究所を訪問して、『数』と『算術』二書の調査を行った。その調査では簡の現物の一部の視察と、整理担当者への聞き取りと討論を行った。この時の調査の結果、『数』と『算術』は、時代の先後はあるものの、まさしく『算数書』と同類の形式を有する書籍簡に他ならないことを知り得た。このとき得られた成果は田村誠、張替俊夫「新たに出現した二つの古算書―『数』と『算術』」（大阪産業大学論集　人文・社会科学編九、二〇〇九年六月）として発表している。

二〇一〇年五月岳麓書院は、その年の九月に内外の中国数学史研究者を集めて、『数』に関する研読会を開催するため、研読会への参加を要請してきた。我々はこの研読会に全面的に協力すべく、研読会の成功のために『数』二百二十余簡の釈文（案）を事前に送付するよう、岳麓書院に強く働きかけた。彼らもこれに応え、八月に我々の研究会を含む全世界の研読会参加予定者に対して

『数』二百二十余簡の釈文と簡注を送付して来た。我々は、二回にわたって集中研究会を開き、送られてきた釈文・簡注の検討をまとめ、「対於岳麓書院蔵秦簡『数』書釈文・簡注的我們検討結果」（一）、（二）として岳麓書院へ送った。

同年九月には研究会より四名の班員が研読会に参加し、岳麓書院の関係者及び世界の中国数学史研究者との討論を行った。そこでは、二〇一一年中に『数』についての釈文・注釈および赤外線写真を含む写真図版を掲載した『岳麓書院蔵秦簡』（貳）が出版されるという情報がもたらされた。

帰国後の二〇一一年十二月に『岳麓書院蔵秦簡』（貳）が出版され、二〇一二年一月研究会はこの書を入手した。研究会では、『九章算術』の訳注を作成する作業が方田、粟米、衰分、少広章と進み、商功章に差し掛かっていたが、この作業を一旦停止して『数』の研究に集中することとし、かつて『算数書』研究で行ったような写真を確認しながらのより精確な研究を『数』について開始した。

この後、「岳麓書院蔵秦簡『数』訳注稿（1）～（6）」（大阪産業大学論集　人文・社会科学編）として発表した『数』の訳注稿は現在さらに推敲を重ねており、『岳麓書院蔵秦簡『数』』（仮称）として出版する段階に入っている。

また、停止していた『九章算術』の研究は再開され、現在は商功、均輸、盈不足章まで進んでいる。現在は「『九章算術』訳注稿（1）～（21）」（大阪産業大学論集人文・社会科学編）として発表されているが、最後の勾股章まで終わればまとめて出版する予定である。

三、今後の展開―北大秦簡『算書』

二〇一〇年一月香港の馮秉均（ひょうしんきん）国学基金会の出資によって買い戻された秦代簡牘（元々盗掘品）がまとめて後北京大学に寄贈された。この秦簡の出土地・出土時期は不明であるが、北京大学秦簡中の「道里書」の地名などから、本簡牘が現在の湖北省の雲夢・荊州地区あたりから出土した可能性が高いと思われる。またこの竹簡中の『質日』に「秦始皇三十一年」、「三十三年」の記述が見えるので、北京大学蔵秦簡が書写されたのは始皇帝後期と推定されている。

この北京大学蔵秦簡において算術簡は最大の分量を占める。すなわち、竹簡四巻（巻三、巻四の一部、巻七、巻八）に渡っており、竹簡四百簡以上に上る。加えて

「九九術」を記した木牘がある。この北京大学蔵秦簡の算術簡（北大・韓巍氏はこれらを『算書』と呼んでいる）については、今の所、韓氏による「北大秦簡中的數學文獻」（『文物』、二〇一二年第六期）と「北大秦簡『算書』土地面積類算題初識」（『簡帛』第八集、二〇一三年十月）しか詳細については発表されていない。

この北京大学秦簡『算書』は『算数書』『数』『算術』と同様の秦漢期の算術書であり、もはや秦漢期の簡牘類に算術書が含まれていても何の不思議も無いことを意味するものであった。研究会は数回韓巍氏と連絡を取り、まず二〇一三年十一月に北京大学を訪問し、『算書』の調査を行った。研究会はさらに二〇一四年九月十八日に北京大学で行われた「北大秦簡『算書』国際研読会」への参加を要請され、そこで「關於北大秦簡『算書』的里田術及徑田術」と題して研究発表を行った。またそこでは、研究会に送られていた『算書』序文に当たる「魯久次問數」の討論も行われた。

今後、この『算書』や未だ釈文・写真版が公開されていない『算術』の公開を待って、『算数書』や『数』の研究で行ったような研究を行うことを準備している。さらにそれらの研究を通して、秦漢期から後漢期へと変遷する中国数学の展開、すなわち秦漢期の算術書と『九章算術』の質的差異を明らかにするとともに、中国古代数学像の新たな再構築を行うこと、さらに『九章算術』の成立年代を推定し、中国古代数学史の流れの中での位置付けを明らかにすることを今後の目標として、研究に励んでいる。諸兄のご鞭撻とご叱正をお願いする次第である。